

英語教育における授業改善に関する研究

——教師の母国語使用に焦点を当てて——

広島県立安芸府中高等学校
上西 幸治

1. はじめに

日々、教育実践していく中で教師自身の授業方法は、学習環境、教師の英語力も含めて、多大な影響を学習者に及ぼしていることはいうまでもない。それが実際にどの程度影響しているかは、教師からは計り知れないものがある。

今回、筆者が焦点を当てたものは、よりよい授業に繋がる授業改善のための学習者の意識である。特に、授業内における教師の使用言語に関しては、学習環境、学習者の語学力や姿勢など、諸問題もあり、現実には様々な考え方、意見がある。しかし、コミュニケーション能力を中心とした英語力の育成に焦点を当てるとなると、「英語を通して英語を学ぶ」という考え方を基本においておく必要があるといえる。そのために必要となってくるのが、教師による学習者理解である。英語授業の中で、とにかく目標言語（英語）を使用しさえすればよいというわけにはいかない。学習者の英語力を鑑みながら、どんな場面で学習者が母国語（日本語）あるいは目標言語（英語）を必要としているか、を考慮しながら、授業実践することが肝要であると思われる。

本稿では、英語授業の中でコミュニケーション能力の育成を中心とした指導方法を考える際に、必要となる教師の使用言語に焦点を当てて、調査・研究を試みた。

2. 教師の使用言語

英語を使用しながら授業を展開していくことは、教師としてあるべき姿である。JETプログラムでAET（現在のALT）を導入していくことが決定されていった一つの理由としては、英語教師が英語力を伸長し自信をもって英語の使用を基本とした授業実践していくことの重要性が挙げられる。

歴史的に見て、目標言語だけで授業を展開していくことは数多く行われてきた。オーラルメソッドやダイレクトメソッドなどはその典型的な例であろう。その実践の一方で、日本では大学受験の影響もあって、

Grammar-translation Method ともいえる訳読中心の教授が主流を占めてきた状況がある。その方法に楔を打ったのがJETプログラムの導入であろう。ALTの導入により、教師自身も従来型の訳読中心からコミュニケーション中心の指導方法に転換せざるをえない状況が生じてきた。とはいえ、実際問題として、全ての教師がその方法に転換していったという訳ではない。大学受験の影響や、教師側の姿勢など、様々な問題が影響し、現在に至っていると考える。特に、本研究では教師の使用言語（日本語か英語）に焦点を当てて調

査及び考察を行った。そこで、使用言語に関する先行研究を見ると、以下のように多くの研究者が調査及び研究を行っている。

まず、Murphy & Sasaki (1998) は、中学校・高校では、学年進行するにつれて、英語使用が減少するという不合理な状況があり、その原因は入学試験にあると指摘している。

Larson-Freeman (1986)は、コミュニケーションのタスクを行う間だけではなく、その説明や学習者に宿題を課すときにも英語使用の必要性を論じている。つまり、教師の英語使用を通じて、英語がコミュニケーションの手段であることを学習者に認識させることが必要であることを指摘しているといえる。

Burden (2001)は、大学で教鞭を取っている外国人教師と日本人学生双方に対して、言語使用に関する意識調査を行っている。そのデータ結果を見ると、「教師が学生の母国語、つまり日本語を授業中に使うべきですか」という質問に対して、4分の3の学生が「時々使うべきだ」と答えており、外国人教師も8割強が「時々はそうすべきだ」と答えている。とはいえ、Burdenの全体的な調査結果では、基本的には英語によるコミュニケーションを通して言語学習を実践することを強調している。

その際に、大切な点は授業内のどんな場面で教師が学習者の母国語を使用するのか、つまりどの場面で学習者が日本語を必要とするのか、ということ教師が認識しているかどうかである。そのことをより明確にすれば、学習者の英語力伸長に対して、より教育効果が上がると考えられる。

まず、Murphy & Sasaki (1998) は、日本人教師が授業で英語を使用しない傾向があることに焦点を当てて調査を行っている。教師が英語使用を回避する大きな理由を2つ列挙している。その一つは、教師が授業で英語を使用する恐怖感である。自らが完璧でなくてはならない思いに捕らわれていて、英語を使用しにくくしているのである。もう一つの理由は、教師が生徒の英語理解が不足していると認識している場合である。英語を使用しても生徒には分からないと先入観を持ってしまっていて使用しないのである。つまり、この研究は、教師自身に大きな問題があると指摘していることになる。学習者のコミュニケーション能力の育成のために、教師自身が積極的に目標言語を使用する姿勢が必要であることを示唆している。

また、具体的な場面に言及している研究もいくつかある。例えば、Willis (1981) は、教師がほんの少しの間日本語を使用することが、授業の中で有効な場合があることを記述している。具体的には、新語の説明をしたり、授業の目的を説明する時、そして英文を読んだ後その趣旨をについて話す時などに日本語の使用が有効であると述べている。

別の観点から、Cole (1998) は、話す活動をしたり発音練習をする時、そして学習者のネガティブな情意面を取り除く時などには、原則として教師は、学習者の母国語を使用すべきではない、と提唱している。

しかし、実際の授業の様々な場面で、教師が英語から日本語に切り換える際に注意しておくべきことは、学習者の英語力を把握しておくことであると考えられる。異なるレベルの学習者は、当然どの場面で日本語を使用してほしいのか、その要求も異なってくるのが現実である。その点に関して、Coleは学力の低い学習者は、個々の単語を訳したり、文法の説明したり、複雑な指示を容易にすることによって、時間を節約し、不安を取り除くことが可能となると指摘している。

3, 研究の目的及び調査方法

3. 1 目的

英語授業を改善するための方策として、以下の項目が今回の研究目的である。

- (1) 日本人教師の授業中の日本語使用に対する学習者の情意面を把握する。更に、学習者が授業中日本語を必要とする場面を調べる。
- (2) 成績と学習者の情意面との関連を分析する。

3, 2 対象者の状況及び調査方法

本校の状況について述べると、広島県下唯一の国際科のある学校であり、毎年帰国子女枠を利用した(編)入学者がある。国際科の生徒は、概して語学に関心が高く、毎年多くの生徒が短期・長期の海外留学をする。クラスの中にも留学生が、ほとんど常時存在する状況がある。

3, 1で述べた目的に基づいて、学習者にアンケート (Appendix 1) を実施した。

実施した時期： 学習者が英語授業に慣れた5月下旬

対象者： 高校2年生国際科34名

実施方法： 4段階尺度によるアンケート方式

このアンケートの具体的な授業内の場面に関しては、Burden (2001) を参照して、アンケートを作成した。授業実践の内容は、以下の通りである。

- (1) 単語の意味などを確実に確認する数分間を除いて、原則、教師は授業中学習言語である英語のみを使用をした。
- (2) 学習内容は、以下に記述するように多岐にわたる。
 - ・文法項目は、仮定法、未来形、過去形など
 - ・リスニング、対話練習
 - ・リーディング (単語・熟語を含む) など

4, 結果と考察

第3章で記述したような目的に基づいて、授業実践をしアンケートを実施した。得られたデータを基に、以下の分析及び考察を行なった。

4, 1 学習者の情意面

まず、学習者の日本語使用 (Q1) と「日本人教師は授業中、日本語を使うべきだ」という学習者の意識 (Q3) との間には、有意差は見られなかった (Table 1)。このことは、教師が使用するべき言語と学習者が使用する言語には関連がないことを意味している。つまり、日本語を使用している学習者であれ、使用していない学習者であれ、教師が授業中、英語を使用して欲しいという意識を持っている者

Table 1
母語使用に関する教師と生徒の意識

単相関係数	0.2687
総計量 t 値	1.5782
有意差判定	n.s.

もいれば、日本語を使用して欲しいという意識を持っている者もいることになる。

次に、教師の日本語使用に関して、学習者の具体的な意向を調べてみた。回収したアンケートを基に、教師が日本語を使用すべきかどうかについての生徒の意識と、教師に母国語を使用して欲しい個々の場面との相関を調べた (Table 2)。その結果、全ての項目において、有意差が出た。具体的に、相関関係の数値が特に高かった項目を順に列挙すると、以下の通りである。

- ・新しい単語を説明する
- ・授業のルールを説明する
- ・生徒が課題 (宿題) をする理由を説明する
- ・授業のまとめをする
- ・生徒をリラックスさせようとする
- ・人間関係を創りだす (だそうとする)

Table 2

教師の母国語使用に関して、生徒の意識と場面との相関

	Q 5	Q 6	Q 7	Q 8	Q 9	Q 1 0	Q 1 1
単相関係数	0.6439	0.5130	0.4924	0.5301	0.5688	0.5688	0.5250
総計量 t 値	4.7610	3.3803	3.2001	3.5366	3.9122	3.9122	3.4982
有意差判定	**	**	**	**	**	**	**
	Q 1 2	Q 1 3	Q 1 4	Q 1 5	Q 1 6	Q 1 7	Q 1 8
単相関係数	0.4240	0.5010	0.5622	0.5600	0.5356	0.4854	0.5807
総計量 t 値	2.6483	3.2749	3.8457	3.8232	3.5878	3.1403	4.0351
有意差判定	*	**	**	**	**	**	**

** : $p < .01$ * : $p < .05$

つまり、このデータから云えることは、授業中教師に日本語を使用して欲しいと思っている生徒は、授業内のどんな場面でも日本語の使用を望んでいるということである。一方、教師に目標言語である英語の使用を望んでいる生徒は、同じくどんな場面においても、教師の英語使用を望んでいる傾向があることがいえる。

次に、具体的に学習者が授業中のどんな場面で教師の日本語使用を期待しているかについて記したい。4段階スケールのアンケート結果の平均点を比較して述べる。

最初に、学習者が教師の日本語使用を期待している項目順に上位4つを列挙する。

- ・文法の説明をする (3.3)

- ・新しい単語の説明をする (3.1)
- ・日本語と英語の文法の違いを説明する (3.1)
- ・生徒の理解を確かめる (3.0)

この結果から考察すると、学習者が文法の学習を英語による説明を通して理解するのは、最も難しいと考えているようだ。確かに、文法項目を説明していく際には、文法に関する項目を英語で知っておく必要がある。しかし、英語と日本語の使用を併用しながら文法指導をしていくと、学習者の文法内容の理解及び発信型の指導に、より効果があるのではないかと考える。また、新出単語を理解する際にも困難が伴うと学習者は意識していることが伺える。学習者が、英語による説明を十分に理解できるならば、あえて日本語で説明する必要はないように思う。しかし、学習者の側にはその意味をより明瞭にするために、日本語で確認したい傾向があるようだ。

次に、授業中どちらかといえば日本語を必要としない、と学習者が思っている場面について記述したい。日本語を必要としない、つまり英語をベースとして教えて欲しいと学習者が考えている場面として、以下の項目が挙げられる。

- ・生徒に様々な指示をする (1.9)
- ・ゲームなど活動の説明をする (1.9)
- ・授業のルール (姿勢など) を説明する (2.0)
- ・日本や外国の文化について話す (2.1)
- ・前回の復習をする (2.1)

いろんな場面での説明事項について、学習者の意識としては教師に英語を使用して説明をして欲しいと願っている傾向がある。上記の3つの場面、つまり「生徒に様々な指示をする」「ゲームなど活動の説明をする」「授業のルール (姿勢など) を説明する」では、次の活動に移行するときや授業の中で何かを始めようとする時には、特に教師が英語を使用することを望んでいることが伺える。また、自国の文化や異文化について学習する時や授業の復習をする時も、どちらかといえば教師が英語を使用しながらの学習を希望していることが伺える。

4. 2 学習者の成績と情意面

学習者の成績は、このデータをとった時期とはほぼ同じ頃に実施したテストを資料とした。テストは、すでに既習の内容を基に実施したテストであり、その内容は、リスニング、語彙、文法能力、読解力、作文力など多岐にわたる。その中でも注目してみたのが、言語使用と関連のあるリスニング力及び全体的な英語力である。尚、リスニング力と英語のテストに関しては、高い相関関係 (1%の危険率で有意差がある) が見られたがゆえに、テストの成績を基にデータ集計を行った (Table 3)。

Table 3 リスニング力とテスト

単相関係数	0.7691
総計量 t 値	6.8069
有意差判定	**

** : $p < .01$

次に、クラスの成績を上位群、中位群、下位群の3群に分けて、統計処理を行った。つまり、「教師は授業中、日本語を使用すべきですか」という質問と成績面の相関関係を調べた。その結果、上位群、中位群とも相関関係はほとんど見られなかった。それに対して、下位群の学習者に関しては、教師の日本語使用と成績面が有意差は出ていないものの、かなりの相関関係を示している (Table 4)。このデータから考察すると、上位群、中位群の学習者は、平均点以上の成績を取っていても、授業中教師の日本語使用を望んでいる者もいれば、英語を使用して欲しい者もいることを示している。つまり、個々の学習者によって、かなり意識の差にずれがあることになる。一方、下位群の学習者は、一人を除いて全員が時々、または頻繁に教師に日本語を使用して欲しいと考えており、しかもかなりの相関関係を示していることから、下位群の学習者には、適宜日本語の使用を念頭に置いた英語指導の実践を図る必要性があるといえる。

更に、学習者全体を見ると、上記で述べたように、情意面にばらつきがあるのも事実である。上位群であれ中位群であれ、学習者の期待する教師の使用言語は、個人によって異なり、その傾向は一定ではない。ただ、アンケートの中身を更に細かく見てみると、相関がないわけではない。その点について簡単に触れたい。

上位群12人のうち4人の学習者が、「教師はほとんど日本語を使うべきではない」と答えている。他の群と比較すると、多い数字である (中位群0人、下位群1人)。当然のことではあるが、成績の上位群に位置している学習者は、授業中の教師の指示や説明も、より容易に理解できる。つまり、実際に英語の説明

Table 4 グループ別学習者の意識と成績の相関

	上位群	中位群	下位群
単相関係数	0.0373	-0.3232	0.5099
総計量 t 値	0.1180	-1.0246	1.7781
有意差判定	n.s.	n.s.	n.s.

など、教師による目標言語である英語を通じた学習を望んでいる傾向があるといえる。一方、英語力 (リスニング力など) 不足の学習者は、授業内容を英語で理解しにくい傾向があるので、適宜日本語を交えて、授業を展開していく必要が出てくる。そこで問題となるのが、クラスに多様な英語力の学習者が存在する場合に、どのように授業を展開していくかである。

筆者は、英語の授業は英語で展開していくことを目標としながら、学習者が日本語を必要としていると考えられる場合には、適宜日本語を交えた指導をしていくことが必要であると考え。例えば、学習者から授業内容について質問が出た場合や、学習者が英語のみでは理解しがたいと考える場合 (文法指導や語彙の説明など) については、実際に英語と日本語の併用が望ましいといえる。

5. まとめ

今回の調査・研究から以下の項目がまとめとしていえる。

- (1) 文法や新出単語などの説明に関しては、全体的に学習者は教師による日本語使用を希望している傾向がある。
- (2) 学習者の英語力が高いと、目標言語 (英語) を通じて学習したい傾向がある。

- (3) ティームティーチングにおけるALTの役割ともいえる場面（ゲームなどの活動の説明、諸文化に関する話や様々な指示など）は、学習者は目標言語（英語）の使用を求める傾向がある。
- (4) 多様な英語力の学習者が存在するがゆえ、教師は学習者の意識を考慮しながら、英語使用の授業展開が肝要である。

基本的には、前述したように教師自身が目標言語（英語）を使用していくという姿勢を示しながら、学習者に言語学習をさせていくことが重要であると考え。Murphy & Sasaki (1998) も、「学習者は、目標言語を浴びれば浴びるほど、より学習がはかどる。教室がその中心的な場所となるのである」と述べている。英語を日本語訳する部分を除いて、基本的に英語授業を英語をベースに教えていくことが望ましいと考える。その際に重要となってくるのが、母国語（日本語）の使用場面であり、目標言語（英語）の使用頻度である。筆者が考えるに、授業内で英語の使用頻度を多くしていくことが理想と考える。その目的を達成するためには、学習者の英語力や意識を考慮しながら、英語を多用しつつも日本語の使用を巧みに考えていくことが肝要であると考え。

Atkinson (1993)も、母国語が適切なときに、適切な方法で使用されれば、それは大いに役立つと述べて限定した学習者にとっての母国語使用を統合した形の指導方法を提唱している。学習者、学習者を取り巻く環境、そして教える側も、それぞれ異なる状況があるので、教える場に応じて学習者の意識を把握し、教師が使用言語を考えていく必要があると思う。今後も、日々よりよい授業展開の模索を続けて、よりよい授業を実践していきたい。

参考及び引用文献

- Atkinson, D. 1993. *Teaching monolingual classes*. London: Longman.
- Burden, P. 2001. When Do Native English Speaking Teachers and Japanese College Students Disagree about the Use of Japanese in the English Conversation Classroom?
The Language Teacher Vol. 25, 4, 5-9
- Chaudron, C. 1988. *Second Language Classroom: Research on teaching and learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Cole, S. 1998. The Use of L1 in Communicative English Classrooms.
The Language Teacher Vol.22, 12, 11-13
- Larsen-Freeman, D. 2000. *Techniques and Principles in Language Teaching*. Oxford University Press.
- Murphy, T & Sasaki, T. 1998. Japanese English Teachers' Increasing Use of English.
The Language Teacher Vol. 22, 10, 21-27
- Willis, J. 1981. *Teaching English through English*. Essex: Longman.
- 大学英語教育学会 (JACET) 内英語教育実態調査研究会 1993 21世紀に向けての英語教育
——全国実態調査を踏まえて—— 「英語教育」別冊・4 Vol.42 No.4 大修館

Appendix 1

英語授業アンケート

以下のアンケートは英語の授業改善のために行うものです。当てはまるものを○で囲んでください。日本人の英語教師がソロで英語を教えるときのことを考えて、答えてください。

- 1, 生徒は授業中、日本語を使ってもよいと思いますか。
頻繁に使ってよい 時々使ってもよい ほとんど使うべきではない
全く使うべきではない
- 2, 1の質問で日本語を全く使うべきではないと答えた人に聞きます。それは何故ですか。
- 3, 日本人教師は英語の授業中、日本語を使うべきですか？
頻繁に使うべきだ 時々使うべきだ ほとんど使うべきではない
全く使うべきではない
- 4, 3の質問で日本語を使うべきではないと答えた人に聞きます。それは何故ですか？その理由を書いてください。

以下の質問は、教師が日本語を使用する場面に関するものです。具体的に授業のどんなときに教師は日本語を使うべきだと思いますか。当てはまるものに○をつけてください。

尚、とてもそう思う(4)、そう思う(3)、そう思わない(2)、全くそう思わない(1)で答えてください。

- | | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 5, 新しい単語を説明するとき | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 6, 文法の説明をするとき | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 7, 生徒に様々な指示をするとき | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 8, 日本や外国の文化について話すとき | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 9, 授業のルール(姿勢など)を説明するとき | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 10, 生徒が課題(宿題)をする理由を説明するとき | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 11, 日本語と英語の文法の違いを説明するとき | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 12, 生徒にテストを課すとき | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 13, 生徒の理解を確かめるとき | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 14, 生徒をリラックスさせようとするとき | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 15, 人間関係を創りだす(だそうとする)とき | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 16, ゲームなど活動の説明をするとき | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 17, 前回の復習をするとき | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 18, 授業のまとめをするとき | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 19, その他、あなたが日本人教師に日本語を使って欲しいと思うときはどんなときですか。書いてください。 | | | | |

Appendix 2

Listening Section (Juniors of International Course)

A.聞き取りの問題です。テープを聞いて、下線部に入れる語を解答欄に書きなさい。本文は2回流れます。また、Julieの立場になったと仮定して、下の問いに英語で答えなさい。

Announcer: In this week's edition of Family Values we look into the question of step families. It's quite 1 for young people today to find that they have a new family, with new stepsisters and stepbrothers. And it isn't always easy. We interviewed some young people and asked how they 2 about having a stepbrother or stepsister. The first person we 3 to was fourteen-year-old Julie Robins from Enfield.

Interviewer: When did your mum and stepfather get married?

Julie They got married in the summer.

Int: So 4 do you live now?

Julie: We live in his house now. I go and stay with my real dad at weekends.

Int: Is that just you or have you got any brothers and sisters?

Julie: No, I'm an only child, but now I've got a stepsister called Rachel. She's two years 5 than me, and stepbrother called Toby, who's a year younger.

Int: Isn't it quite nice to have company?

Julie: Um. It's OK sometimes but I quite like 6 an only child.

Int: How do you get on with your stepsister?

Julie: She's all right. I don't see that much of her 'cos she's always out with her friends. But she gets on my 7 in the mornings.

Int: why?

Julie: She takes 8 in the bathroom, just when I need to go in, and she's always on the phone. It drives me mad and sometimes.

Int: How does she get on with your mum?

Julie: All right, I suppose. She doesn't argue with her or anything.

Int: 9 about your stepbrother?

Julie: Mm. He's OK but he's obviously got different interests from me.

Int: In what way?

Julie Well, he likes football and playing on his computer and things like that.

Int: But you don't.

Julie: I prefer listening to music and 10 out with my friends. Anyway he's younger than me.